卯年にちなむもの

本会会長 原田博二

新年明けましておめでとうございます。

本年は、卯年、それも癸卯(みずのとう・きぼう)の年で す。この癸卯というのは、「えと」とも呼ばれる干支(かん し)、すなわち十干十二支の組み合わせからなっていま す。

この十干と十二支を組み合わせると、1番最初が甲子 (かっし)、2番目が乙丑(おつちゅう)、3番目が丙寅(へいい ん)と続き、最後の60番目の癸亥(きがい)まで全部で60種 にもなります。ちなみに癸卯は、40番目です。これを年に あてれば、甲子の年から癸亥の年まで60年で一巡するの です。だから環暦というのは、例えば、今年、癸卯の年に 生まれた人は、61年後に再び癸卯の年がまわってくるこ とから還暦(かんれき)といい、長寿を祝うのです。

卯年の出来事

長崎で卯年に起こった主な出来事は、1639年(己卯)の こと、幕府は、ポルトガルとの貿易を禁止するとともに長崎 在住のイギリス人やオランダ人とその妻子を追放、ここに 鎖国体制が完成しました。なおこのなかにはジャガタラ(現 在のインドネシアのジャカルタ)に追放されたイタリア人ニ コラス・マリン(故人)の妻マリアとお万、お春の娘2人も含ま などで、何とも情けない話です。さらに「兎の角論(つのろ れていました。

このように1639年は動乱の年でもありましたが、1855 年(乙卯)のように新しい目標に向かっての出発の年もあり ました。

1855年、幕府は、矢田堀景蔵や勝麟太郎(後の海舟)ら を長崎に派遣、ここに海軍伝習所が開設されました。同伝 習所は、1859年廃止されましたが、多くの人材を育成す るなどわが国の近代化に大いに貢献しました。

卯年生まれの長崎の著名人

長崎の著名人のなかで、天正遣欧少年使節の一人とし てローマに派遣された中浦ジュリアンは1567年の、松尾 芭蕉の高弟で、西の俳諧奉行と称された俳人向井去来と オランダ商館医で出島三学者の一人と讃えられたケンペ ルはともに1651年の、阿蘭陀通詞のかたわら蘭書を翻 訳、わが国に最初にコペルニクスの地動説を紹介した本 木良永は1735年の、東洋日の出新聞を発行、さらには 孫文の革命運動を応援した鈴木力(天眼)は1867年の、 長崎学を大成、数々の著書を残した古賀十二郎は1879 年の、芥川龍之介や竹久夢二など画家や文芸作家を援 助、自らも南蛮美術の研究に携わった永見徳太郎と若山 牧水の門人で若くして亡くなった歌人中村三郎はともに1 891年の、それぞれ卯年生まれでした。



卯(兎)にちなむことわざ

卯(兎)にちなむことわざのなかで、「兎に祭文(さいもん)」 というと、どんなに意見しても聞き入れないこと、まさに柳 に風、「兎の股引」も何をしても後(あと)の続かないこと、 「兎の兵法」というと、つまらぬ策略を用いて失敗すること ん)」というと、東に角があるはずはなく、全くの嘘話(うそば なし)のことです。呉々も用心しましょう。

さらには「兎を見て鷹を放つ」というのは、勝ち急ぐと何 事もうまく行かないことですが、「兎を見て犬を放つ」と、鷹 ではなく犬であったらまだ間に合うこと、たとえ失敗しても やり直すことができることのたとえです。「兎の登り坂」 は、勿論、得意なこと、「脱兎(だっと)のごとし」とは、極め て素早いこと、「烏兎(うと)匆々(そうそう)」とは月日の過ぎ るのが早いこと、「兎(う)の毛でついた程」は、極めて細か いことなどです。しかし、「二兎を追う者は一兎を得ず」 は、同時に違った二つのことをしても、どちらもうまく行か ないことのたとえ、これまた呉々もご用心。

そこでこの一年、兎の角論とか兎の兵法、兎の股引とか 東に祭文などと呉々もいわれないよう、東を見ても鷹を放 つことなく犬を放ち、年月は烏兎匆々と早いもの、ですか ら兎の登り坂と得意なことは脱兎の如く、それでいて兎の 毛でついたように細かく、さらには二兎を追うことなく、確 実に活動して行きたいものです。

本年は「きぼう」(癸卯)の年、大いに希望をもってこの1年 頑張りましょう。改めまして本年もどうぞ宜敷お願いいたし ます。